温州みかん隔年交互結実実証試験（Ｈ２１～Ｈ２４）

１　ねらい

西牟婁管内の早生温州は、隔年結果が年々強くなり、年による収量の差が大きく、安定生産が問題となっている。

そこで、連年安定生産技術として、管内でも上部全摘果は栽培に取り入れられてきているが、隔年交互結実栽培はあまり実施されていないことから、その有効性について検討する。

２　活動の経過

（１）園地概要

場所：田辺市上芳養

品種：宮川早生

設置：平成２１年度

「試験区：　遊休年(21 年)→結実年(22 年)→遊休年(23 年)→結実年(24 年）」

試験区は、今年度、結実年にあたり、通常管理に加え「葉面散布による樹勢維持」を行った。

5/25	バーク堆肥施用（80 Ｌ/本）
6/18	樹勢維持のため夏肥を施肥 ※夏芽が発生せず、葉の緑化が遅れぎみ。
6/26	摘果
	病害虫防除
	かん水
7/9 **7/17** **7/25**	葉面散布（尿素（800 倍）
8/27	摘果
8/31	マルチ敷設
12/10	収穫
	施肥
	バーク堆肥施用（80 Ｌ/本）

３　調査結果

（１）収穫量（２３年産）　　［ 収穫日 H23.12.5 ］

	収穫量（kg/本）		
	H22	H23	H24
試 験 区（裏年）	157.9		
慣 行 区（表年）		177.5	
試 験 区（表年）			140.0

階級構成

	Ｓ以下	Ｍ	Ｌ	２Ｌ以上
試験区（H22）	３０％	４２％	１６％	１２％
慣行区（H23）	４１％	３４％	１５％	１０％
試験区（H24）	９３.８％	４.８％	１.２％	０.２％

（２）園地の状況

○試験区

結実年であったものの、生理落果が少なかった。

夏期の干ばつにより夏芽がほとんど発生せずに緑化も遅れた。

夏期に窒素の葉面散布を３回行い、樹勢の維持を図ったが、結果として果実肥大が鈍く小玉果となった。

○慣行区

前年の着果により樹勢の低下が著しく、春の生理落葉が多かった。

夏期に窒素の葉面散布を３回行い、樹勢の回復を図った。

３　考察

隔年交互結実による完熟栽培は、収穫後の葉面散布剤の使用は時期的にタイミングが難しく、樹勢回復が難しい。

そのため、春先に葉面散布剤の使用で樹勢回復を図る必要がある。

結実年は着果量が多いため、早期摘果が基本になるが、夏芽が発生しない場合には早期摘果に重点をおき、併せて樹勢維持のための葉面散布等を行う必要がある。

結果として、隔年交互結実は、結実年において果実肥大が夏期の気象条件に大きく左右され、干ばつ年では特に小玉果が多くなることから、小玉果の販売が可能な場合に、隔年交互結実も栽培方法の一つとして導入できると考えられる。